

# 反改憲運動

## 通信 第4期

1部 200円  
2009. 5. 13 No. 24

〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-1-18 近江ビル4階  
Tel. & Fax. : 03-5275-5989  
E-Mail : han-kaiken-editor@alt-movements.org  
Website : <http://www.alt-movements.org/han-kaiken/>  
年間定期購読料 4,000円 (2008. 6~2009. 5)  
郵便振替 00190-7-11558 「反改憲」運動情報通信

## 第4期最終号にあたって ——改憲派の巻き返しを阻止し憲法を生かす民衆の力を!

今年の「憲法記念日」をめぐる情勢について、幾つかの特徴的事例を取り上げてみよう。

第1は、「憲法審査会」を始動させようという動きである。2007年5月、当時の安倍内閣の改憲強行突破路線の下で「改憲国民投票法」が成立したが、そこで設置された衆参両院の「憲法審査会」がいまだに始動していない状況に焦りをものとした自公両党が、審査会の定数(50人)、国会閉会中も審議を行う、などの運営基準を含む「規定」を憲法記念日以前に決めて「審査会」を始動させようという動きを強めてきたことである。参院の多数派である民主党は、「規定作成」それ自体には異議を唱えてはいないものの今国会中の始動には反対という立場をとっており、仮に与党が衆院で「憲法審査会」始動を多数で決めたとしても、「片肺飛行」になってしまう。したがって少なくとも「憲法記念日までに始動」という与党のアドバルーンは頓挫した。しかし、油断できないことはいうまでもない。

第2は、去る3月に総務省が3,800万円の予算を使って500万部も発行した「ご存知ですか? 平成22年5月18日から『憲法改正国民投票法』が施行されます」というリーフレットである。確かに2007年5月に成立した改憲国民投票法は3年の期間を置いて来年5月には「改憲草案」の上程・発議が可能になることになる。しかし「憲法審査会」は現に始動しておらず、「一般国民投票の是非」「投票の方法」「成人年齢の見直し(つまり投票年齢を18歳に引き下げる問題)」、「広報・広告」「運動規制」など18項目にわたる付帯決議が参院段階でつけられており、こうした項目の検討がなんら行われていないことは言うまでもない。しかし「投票」する男のイラストを載せた総務省リーフレットは、あたかも来年5月には「国民投票が施行されます」という「誤解」を意識的に生み出し、改憲ムードを醸成するキャンペーンという性格を持っている。

すでに総務省は09年度予算で「国民投票法」関連で46億9,000万円の予算を計上し、そのほとんどが「国民投票システム」構築のために全国自治体に交付される金額である。総務省が主導し、自治体を動員したこうした大宣伝に、私たちは異議を唱える必要がある。

第3は、9条を桎梏と印象付ける恒常的海外派兵・戦争国家づくりの既成事実化がさらに深まっていることである。3月に「海上警備行動」を名目に海自護衛艦がソマリア沖・アデン湾に派兵された。アフリカ東岸という日本から1万キロも離れた海域に派遣された護衛艦は、活動計画になかったシンガポール船やマルタ船の「警護」にただちに乗り出し、実際「不審船」を「大音響発生装置」によって追い払うという作戦に従事した。政府はこの脱法的行動を逆手にとり、そうした軍事活動に「法的根拠」を与えるために海賊対処新法をスピード審議で成立させようとしている。4月初めには朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)のロケット発射を口実に、「弾道ミサイル破壊措置命令」を発動し、日本に向かうのではないことが明白なロケット破壊の実戦態勢を取った。

5月3日に行われた改憲派「新しい憲法をつくる国民会議」の集会では小池百合子・元防衛相が「護憲派は生命・安全・国益よりも『憲法を守れ』と自縄自縛に陥っている」と批判し、若手の木原誠二衆院議員は「新憲法をつくり国民の国防義務などを盛り込むべき」と語ったと報じられている。「いのち・安全」や「国際貢献」が違憲の海外派兵・戦争国家づくりの既成事実の上に改憲を促す世論形成に利用させられている。

こうした動きの一つひとつに注意をはらい、戦後最大の資本主義の危機の中で生存権そのものを剥奪されている状況に立ち向かい、改憲の動きを多様な運動のつながりで阻止しよう。第4期最終号にあたり、引き続き第5期に入る本紙にご支援を。  
(国富建治/事務局)

以前このコラムで取り上げたことのある大学教員が、憲法記念日前日の朝日新聞に登場していた。日本の国益を真っ向から掲げたソマリア沖への自衛隊派兵は、建前として世界益を掲げていたこれまでの派兵よりずっと違憲度が高い。だが護憲運動は盛り上がりず、派遣を容認している。「憲法九条は日本人にはもったいない」とこの人は言う。▶細々と取り組まれた派兵反対の取り組みを意図的にだか無視し、自分も日本人であ

# 憲 喧 嘩 場

ることを棚に上げて偉そうに何言ってるんだ? という反発は小出しにしておく。気持ち悪いのは、一国平和主義はダメ、武力行使が必要なこともあると主張する彼が、舌鋒鋭い護憲派として活躍している現実だ。▶多くの護憲派は九条それ自体を目的化していると言いが、前文と九条をつなぐ努力をすべきという彼の主張こそ現行憲法の絶対化だ。憲法にどう書かれていようと派兵には反対、っていうことのはずだから。(た)

# 5・31「スピークアウト for アクション：イスラエルを変えるために」に参加を！

あの、ただただ惨いといしか言いようのないイスラエルのガザ侵攻が止んでも、ガザ住民があいかわらず展望の見えない状況のなかにいることは変わらない。それでもあえて「希望」を問われる場合には、そんなものは私たち〈外部〉の人間が、イスラエルの政策を変えさせるために何か取り組むことを通じてしか見えて来ないだろう、と言いたい。あのひどい殺りくを放置して許してしまうのではなく、イスラエルに国際的な圧力をかけ、政策変更を迫るためには、今年これからが勝負だ。

私たち「イスラエルは占領とガザ侵攻をやめろ！」実行委員会は、イスラエルによるガザ侵攻に抗議の意思表示をするため、1月に「スピークアウト&デモ：イスラエルは占領とガザ侵攻をやめろ！」を企画・実行した有志である。イスラエルの一方的停戦のあとにすぐ解散するのではなく、占領もガザ封鎖も続くなか、これまでの経験を共有し合いつつ、新たに知恵を出し合う場を一度作ろうということになった。5月31日の「スピークアウト for アクション：イスラエルを変えるために」では、ガザ情勢の報告や状況分析だけではなく、それらを踏まえ、私たちが日本社会の中でできることについて分科会で話し合えればと思う。

2003年、イスラエルに対するボイコットなど経済的圧力を伴う取り組みについてパレスチナの諸団体が世界中に呼びかけたが、これまで日本ではなかなか具体的なかたちにならなかった。しかし昨年末からのガザ攻撃のなかで、「今こそボイコットを始める時でないか」という声がようやく高まっ

た。このボイコットの意義や実践例の紹介、引き続き検討すべき課題などについて、第一分科会で取り上げることにしている。

それから、イスラエルが使用している兵器の実態について、まず具体的な事実を知ることから始める第二分科会。第三分科会では、イスラエルの政策決定者らを国際法のもとに裁かせるため、私たちにできることについて問題提起と討論をする予定だ。また、最近の日本政府の文書にイスラエルの占領の事実がまったく言及されていないことを取り上げ、歴史的事実の見直しから始めようという趣旨の第四分科会は、「パレスチナ問題って実はよく分からない」という人にも参加してもらいたいと思って準備している。

各分科会の報告者やコメンテーターに、シンポジウムの形で最初の問題提起をしてもらう。「パレスチナの平和を考える会」の役重善洋さん、弁護士の東澤靖さん、中東研究者の板垣雄三さん、たんぼぼ舎の山崎久隆さんという多様な顔ぶれが出揃う。全体で5時間をかけるイベントになるが、じっくりと議論に関わりながら、イスラエルだけでなく、イスラエルの蛮行を放置・黙認している日本政府やこの社会のありようを変えていくきっかけとしたい。多くの方々の参加を期待している。

▶ 5月31日(日) 13:30～／於：在日韓国YMCA (JR水道橋駅徒歩6分)【内容の詳細は6面に掲載】

(田浪亜央江／「イスラエルは占領とガザ侵攻をやめろ！」実行委員会)

## 立川憲法集会の報告◆派兵より連帯を！世界の中で生きていく

毎年立川の地で行なわれる憲法集会。今年は、5月3日、立川柴崎学習館にて「09憲法集会——派兵より連帯を！世界の中で生きていく」と題して行なわれた。立川の憲法集会では、メイン講演の前に地域で活動する人々が発言するリレートークが行なわれる。今年は、「府中緊急派遣村実行委」の東浩一郎さん、三多摩ピースサイクルの大森進さん、西東京朝鮮第1初中級学校・オモニの会のリ・ジョンダンさんの3人が発言した。

東さんは、府中で立ち上げた緊急派遣村の活動を紹介し、派遣労働者の置かれた厳しい状況について報告した。いっしょに闘おうと呼びかけても派遣労働者は生活の相談に来ているので、闘うというところまでは中々いけないという発言が印象的だった。大森さんは、今年で24年の活動になる。各地域のネットワークをつなぐという主旨で始めた活動だが、そこから各自治体を周ったり、フィリピンの元従軍慰安婦の人たちと交流するようになった。継続は力なりで自治体も当初はぞんざいな扱いだったが、しだいにきちんと対応するようになり、フィリピンの元慰安婦の人たちとも信頼関係を築けるようになったと報告してくれた。リさんは、非常にパワフルな人で朝鮮学校の保護者の会＝オモニの会の活動を紹介

してくれた。選挙権が与えられたら投票に行くのではなく自分が立候補したいという発言に会場も沸いていた。

メインの講演は「国家の枠を超えて生きる——国民としてでなく“社会”人として」というタイトルで現代企画室の太田昌国さんが講演した。主なテーマは北朝鮮問題。2002年の小泉訪朝以降、「拉致被害者家族会」は戦後最大の圧力団体になった。それ以前、家族会の人々の訴えは政府やメディアからも無視されてきた。しかし、それが逆転することで家族会の人々は社会人としてではなく、国家を背負う国家人として発言するようになってしまった。植民地支配と侵略という日本近代100年の総括をしなければ、日本は北朝鮮に要求すべきでない。この自らの責任を果たさなければ相手に要求しないという原則をお互いの原則とすべきである。拉致被害者家族会の中でも蓮池透さんは、日本は戦後補償をして、首相は国交正常化を図るために訪朝すべきだと主張している。これは、弟の薫さんとの対話の中で培われたものだ。

以上のような太田さんの講演の後、「ガザの歌弾き語り」と題してヤスミン植月千春さんの歌とピアノ演奏があった。憲法施行62年の憲法の日、憲法を捉え返すよい機会になった。(大西一平／立川自衛隊監視テント村)



## 報告◆2009年5月3日の札幌

5月3日、札幌では午前中に二つの大きな「護憲集会」と街角リレートークがあった。ここ数年、このパターンが定着している。

一つは、民主党系の平和運動フォーラムなどが主催する「憲法を私たちの手に！ 5・3北海道集会」（10～12時／北海道自治労会館5階大ホール）。北海道大学の岡田信弘さんが「9条 VS 一国平和主義論——憲法9条の国際性について考える」というテーマで講演した。この集会には「護憲派」の上田文雄札幌市長も出席し挨拶することが慣例になっている。

もう一つの集会は、共産党系の北海道憲法会議や北海道革新懇談会、道労連などが主催する「09許すな壊憲！ 道民集会」（10～12時／札幌市教育文化会館）。北海学園大学の太塚秀之さんが「転換期の世界——日米関係の新たな構築をめざして」というテーマで講演をし、「海賊対処法案の問題点」、「雇用・くらしSOSネットワーク北海道の取り組み」という二つの報告があった。

二つの集会の事務局的な役割をしている人たちと、私たち「ほっかいどうピースネット」の三者は3月20日のピースウォークなどを共催している。だから、同じ時間帯に二つの集会があるという「慣習」を何とかできないかという話は、そのレベルではするのだけれど、「いざ、一緒に」となると、それぞれの組織のメンツのようなものがあって難しいようだ。

その代わりというわけでもないが、二つの集会が終わった後に、街頭でのリレートークを始めるようになった（午後0時30分～1時30分／大通り公園西4丁目）。今回で三回目。

この時期の札幌は春満開なので（桜も満開だし、いろんな花もいっせいに咲き始める）、大通公園のベンチや芝生に座っている人や街角を歩く人などに、この日だけでも憲法について少しでも考えてもらいたい、という思いもあった。呼びかけたのは、ほっかいどうピースネットと北海道平和運動フォーラム、医療九条の会、札幌YWCA。

車道に宣伝カーを1台停め、大通りを横断する歩道（約100メートル）に小さなピース旗やパネルを飾り、マイクスタンドを立て（札幌は舗装の幅が広い）、その後には大きなピース旗を立てた。各団体から1人5分ほど話し、途中でトランペット演奏と歌が入って、約1時間。チラシの受け取りも良く、なかなか気分良く終わった。

5月2日には、江別市でも市民グループによる講演会とデモがあった。デモに対して警察が、ぐちゃぐちゃ言ってきたらしい。こんなことは今までなかった。

札幌でもトークの途中、右翼の宣伝カーが「憲法改正」を訴えながら、何度も通り過ぎていった。札幌ではこれまではなかった動きである。来年は、歩道をもっと大掛かりなステージにして、リレートークをやりたい。

（越田清和／ほっかいどうピースネット）

## 報告◆アジアをむすぶ平和のひろば——あんにょんハイサイわくわくコンサート

5月2日、東京・上野水上音楽堂で、「アジアをむすぶ平和のひろば 5・2あんにょんハイサイわくわくコンサート」が行われ、約700名が参加しました。

コンサートは農楽隊の会場内の練り歩きで開始され、前半は、朝鮮第一初中級学校の生徒たちが美しい民族衣装に身を包み可憐な舞を披露し、次に、朝鮮学校生徒たちの親の世代の男性ヴォーカルグループ「アエ☆ユニット」が「イムジン河」など3曲を歌い、素晴らしいコーラスに大きな拍手を受けました。続いて日本人と在日フィリピン人のバンドの「生田社とラヒンカユマンギ」が登場し、フィリピン・ミンダオ島では、米軍の対テロ戦争によって、50万人とも言われる難民が生まれている現状を訴え、民族楽器を交えた迫力あるバンド演奏で、力強く故郷と平和への思いを歌いました。更に琉球舞踊喜扇本流、琉球古典舞踊研究所代表の川口喜代子さんと門下生により、あでやかな紅型の衣装で「四ツ竹」などの古典舞踊と「エイサー」を川口さんの解説で披露しました。前半の最後に寿[kotobuki]が、島唄「安里屋ユンタ」や「上を向いて歩こう」の替え歌の「前を向いて歩こう」など、参加者を乗せながら元気に明るく歌い、会場は大いに盛り上がりました。

アピールタイムでは、在日韓国青年同盟のメンバーによる寸劇で、対北敵対政策で連携を強める李明博政権と麻生政権

を風刺し、北側オリニ栄養パン工場東京事業本部の金寿子さんから支援の訴えがありました。2つ目は、世界自然保護基金日本委員会の花輪伸一さんが、スライドを使って、沖縄・辺野古での米軍基地建設によるサンゴやジュゴンへの影響について、自然保護の観点から解説し、環境アセス調査の結果がいかにでたらめなのかを指摘し、これを受けて「辺野古への基地建設を許さない実行委」より、環境影響評価準備書に対する意見書を出るだけ多くの人が出そうとの訴えがありました。

後半の韓国のマダンでは、初めに韓国側共催者の「ジャバルテ（わくわく文化学校教師協会 jobarte）」代表の李ウンジンさんが挨拶した後、民俗楽器演奏チーム「トヌム」が、曲芸のように首を振りながら激しい演奏をし、会場全体の拍手喝采を受け、続いて「コッタジ」の作詞作曲を手がけ、この日ギター演奏もしたチョン・ユンギョンさんが2曲を歌いました。続いて韓国・民衆歌謡グループ「希望の歌コッタジ」が、「人は花より美しい」「歌の夢」「反撃」など6曲を歌いました。味わい深い日本語訳の歌詞の字幕を見ながら、力強い熱唱に会場全体が魅了されました。最後にこの日の出演者全員が舞台上上がり、「花」「岩のように」を歌い、平和のアジア、米軍基地のないアジアをつくろうという思いを一つにしました。

（尾沢孝司／日韓民衆連帯全国ネット）

## 報告◆六十億のメーデーがはじまる——5回目の「自由と生存のメーデー」

2005年からフリーター全般労働組合が呼びかけている「自由と生存のメーデー」。5回目となる今年のメインタイトルは「六十億のプレカリアート」であった。世界人口は65億。そのうち60億は不安定な生を強いられる私たちの仲間。敵は少数。たかだか5億人程度である。ひとびとを序列化し、切り分け、合い争わせることで新身分制を確立する新自由主義を、私たちは人類の多数派として葬送する。それとともに、来る(?)ニューディーラーの時代におそらくふたたび強化されるであろう「国民主義」の似非多数派を拒否するためにこのスローガンを掲げた。

東京でのメーデーイベントは、5月1日の「ムービーメーデープロジェクト」から5月4日の「全国交流会」まで、4日間にわたるまさに「ゴールデンメーデーウィーク」であった。この4日間に全国のインディーズ系メーデーイベントに取り組む仲間たちも東京を訪れ交流した。加えて東京からはミラノのユーロメーデー、ソウルの「働かない者たちのメーデー」への参加を果たし、韓国からは非正規労働センターと全国ペクス連帯の活動家を迎えることができた。

1日の阿佐ヶ谷ロフトには120名が参加。第一部では昨年のメーデーツアーから生まれたドキュメンタリーロードムービー「黄金の旅団と地上の星」を上映し、ソウルとミラノからメーデーライブ中継を実施、第二部では映像表現の可能

性と映像制作者の悲惨な自由についてトークした。翌2日の青山ウィメンズプラザでは220名の参加者とともに稲葉剛さん(住まいの貧困に取り組むネットワーク)、中島和之さん(山谷争議団・反失実)、菊地謙さん(「自由と生存の家」実行委員会)を迎え、「居住」問題の現状と課題を討議。その後、労働組合の作り方、生活保護の取得の仕方、民主主義の実践に関するワークショップを行い、参加者を交えて「生きることとは迷惑か!?!」をテーマに討論を行った。3日は宮下公園を出発して渋谷のど真ん中を突きぬけるサウンドデモ。600名が参加した。デモ後のアフターパーティにも200名が参加、終電を逃す人も多数だった。すでにyoutubeなどにデモとパーティの映像が上がっているので当日の様子はそちらで。

「自由と生存のメーデー」は各地の「インディーズ系メーデー」との協働の中にある。北見、札幌、仙台、つくば、新潟、富山、名古屋、京都、広島、福岡、熊本、町田、横浜、高崎、阿佐ヶ谷など有象無象のメーデーがことしも取り組まれた。デモや集会だけではなく、上映会や交流会、パジャマパーティ、読書会に至るまで多種多様の蠢動である。私たちはさらにソウルの仲間、ユーロの仲間たちとともにモンドメーデーを作り出す。また来年!

(山口素明/フリーター全般労組副執行委員長)

## 憲法を読む◆『少女の記した太平洋戦争』 (川端富美子著/文芸社/1500円+税)

昭和15(1940)年から19(1944)年半ばまで、小学4年生が女学校1年生になるまでつけた日記の抜粋であるが、少女のこととて、1日分が短いので相当詰まった抜粋となっている。少女は三重県の「伊賀盆地に位置する城下町」で心豊かに育った利発な小学生。テレビがなかったころの子どもたちは、自然や街の行事や子どもらしい細工物などに頭と身体を精一杯つかって暮らしている。その様子を土地の言葉や言い回しで表現していて、きつといまでは失われたものの記録にもなっていると思われる。

しかし、この日記の少し前、1937年には日中戦争が始まっていて、それはもう少女の意識にしっかり植えつけられてい、常に戦地の兵隊さんの苦勞に感謝しつつづけている。1941年の12月8日の朝には「太平洋戦争」勃発のラジオ放送を聞き、大人たちの戦時体制の輪が学校から周りから、子どもたちの世界をだんだん縛っていく。

「七月七日 昭和十二年七月七日五年前の今日北支那盧溝橋において事件が起こり、それが支那事変となり、とうとう世界の米英両国と戦争するようになりました。それが今日の大東亜戦争。あのにくし蒋介石、ルーズベルト、チャーチル、一度にねじふせたいような、満四年間支那の後押しをして日

本を困らせた米英、明日は七カ月目の大東亜戦争の大詔奉戴日。／この二日間支那事変、大東亜戦争に花と散られた兵隊さん方に感謝の目礼をささげ、今大東亜戦争で戦っていられる兵にも感謝の誠をささげよう。」(昭和17年分)

のどかな記述が多いなかに、こんな硬ばったページが挟まり、戦時教育が暗い翼を広げていく様子が手にとるように見える。子どもたちはもちろん、一般市民も誇張された戦果の情報しか与えられず、「大東亜共栄圏」が実現するものと信じ、じわじわと迫り来る不自由に耐え忍んでいく。おまけに、言論統制、間諜(スパイ)への警戒が大袈裟に強められ子どもたちの生活を暗くする。「機密事項」を振り回しての情報隠しはこの国の伝統なのか。

残念なのは収められているのが、米軍の本土空襲が始まった1944年の6月までで、学徒動員がこの少女にまで及んだのか、苦しい日々がどうであったのか、敗戦がどう捉えられたのかを知ることができないことだ。ということは比較的平穏な日々はここで終り、日記をつけ続けられる状況ではなくなったことを示しているのかも。多くの図書館に納められ、子どもが戦意高揚していく過程が広く読まれるよう期待したい。

(梶川凉子/事務局)



# 反改憲ニュースクリップ

2009年4月16日～5月4日

## 民主「前原首相」なら 自民党と同じ——安倍晋三

【4月16日】〈海賊法案〉共産党の志位和夫委員長が東アフリカ・ソマリア沖の自衛隊活動を念頭に置いた海賊対処法案について、武器使用基準の緩和や護衛対象の拡大を盛り込んだ政府案と、国会の事前承認を義務付ける民主党の修正案双方に反対する考えを示した。志位は政府案を「本格的な武力紛争が起きた時に武力行使の先例を作る。廃案しかない」と批判。民主案については「海賊対策で自衛隊艦船を派遣し、武器使用基準を緩和することは政府案と共通だ」と指摘。

〈CIA 拷問〉オバマ米政権がテロ容疑者に対する拷問を正当化したブッシュ前政権作成の公文書を開示した。一方、拷問を実行した当局者の刑事責任を「免除」する方針も発表した。

【4月17日】〈前原なら同じ〉「前原さんが民主党政権で首相になれば、自民党とほとんど変わりが無い」。安倍元首相がワシントンのシンクタンクでの講演後の質疑で、同じ会合に出席するためともに訪米した民主党の前原副代表の名前を持ち出した。会場からの質問は「政権交代すれば民主党の外交政策は」。安倍は「この質問に答えるには、一緒に来た前原さんを連れてきた方がよかったかもしれない」と笑わせた後で「よく言えば多様性があり、現実をいえば統一された政策を持っていない」と民主党の政策を論評した。

【4月19日】〈また中川〉中川昭一前財務相が北海道帯広市での会合でミサイル発射を非難する国連安全保障理事会議長声明に反発して北朝鮮が核開発再開を宣言したことに関連し「純軍事的に言えば核に対抗できるのは核だというのは世界の常識だ」と述べ、日本として核武装を議論すべきだとの考えを表明。中川は安倍政権で自民党政調会長を務めていたときにも「憲法でも核保有は禁止されていない」と発言している。〈世論調査〉朝日新聞社の全国世論調査によると、麻生内閣の支持率は26%で前回調査の22%からやや回復した。不支持は57%（前回64%）だった。首相が打ち出した追加の景気対策については、「評価しない」が60%で、「評価する」の25%を大きく上回った。

【4月23日】〈国民投票法〉与党が衆院憲法審査会の委員数や運営方法などの手続きを定める規程の制定を求める動議を提出した。これを受け、衆院議院運営委員会が同日昼、趣旨説明と各党の意見表明が行われた。与党の規程案は、審査会の委員数を50人とし、憲法改正原案に関する公聴会の開催を義務付けた。また、議事は出席委員の過半数で決めるとしている。動議が衆院議運委で採択されれば、これが同委の案となり、本会議で可決されて憲法審査会の規程となる。〈集団

的自衛権〉麻生太郎首相は安倍政権下で設置されていた「安全保障の法的基盤の再構築に関する懇談会」で座長を務めた柳井俊二元駐米大使と首相官邸で会談、同懇談会が昨年まとめた集団的自衛権の行使容認を求める提言について説明を受けた。首相はこれまでも行使容認に前向きな姿勢を示しており、会談は、次期衆院選もにらんで、中期的課題として集団的自衛権の問題を取り上げるための布石との見方が政府内には出ている。

【5月1日】〈フランスメーデー〉メーデーのフランスでは従来は別個にデモを行っていた労働総同盟（CGT；共産党系）、フランス民主労働連盟（CFDT；社会党系）らの主要8労組が初めて共同でデモを実行。社会党も2002年以来、中止していた党としてのデモを組織するなど大動員の結果、全国で280団体が参加する歴史的なデモとなった。大動員の背景としては政府の景気浮上策への不満や世界的な経済危機を「利用している企業主」への不信などが挙げられている。

【5月3日】〈憲法記念日〉朝日新聞社が実施した全国世論調査によると、憲法9条を「変えない方がよい」が64%に達し、「変える方がよい」は26%にとどまった。憲法改正が「必要」とする人は53%いるが、その中で9条を「変える方がよい」とする人は42%、「変えない方がよい」が49%だった。9条に対する意見は、安倍内閣時代に「変えない方がよい」49%、「変える方がよい」33%だったのが、福田内閣のもとでの昨年4月調査では66%対23%と差が大きく広がった。今回も昨年から大きな変化はなかった。

【5月4日】〈田母神〉前航空幕僚長の田母神俊雄が講演で、核兵器廃絶について「できるわけがない。日本も核武装した方がいい」との認識を示した。田母神は核兵器について「一発でも命中すれば、その国は被害に耐えられない。戦争が拡大するのを防ぎ、今後絶対に使われることもない」「核保有国かどうかで国際的な発言力には天と地の違いがある。日本に発言力がないのは核兵器がないからだ」と指摘。〈自衛隊いりません〉衆院安保委員会で浜田防衛相が先島への自衛隊配備の検討を明らかにしたのを受け、平和・労働7団体で組織する「平和憲法を守る八重山連絡協議会」が八重山への自衛隊配備を許さない緊急集会を、新栄公園内の9条の碑前で開いた。80人余が参加、「軍隊としての自衛隊はいらない」と「ノー」を突きつけた。全員で決議を採択し、集会を起点に先島ぐるみで反対運動を展開していく決意を宣言した。防衛相に送付する予定。〈中南米政策は失敗〉クリントン米国務長官が米国の中南米政策に触れ、一部の反米左派指導者を孤立させようとしたブッシュ前政権の方針は失敗したと断定、イラン、中国やロシアがこの間隙を縫って政治、経済的進出を図る結果に終わったとの見解を示した。米国務省での職員との集会で表明した。イランなどによる進出は米国の利益にならないと指摘、成否は別にして、米国は政治的意見が異なる中南米諸国の指導者とも話し合わなければならないと強調した。キューバやベネズエラを念頭に置いた発言となっている。対キューバ関係については、現在はカストロ政権からの対応待ちであるとの考えを表明。

# 私も一言 86

豊田直巳 (フォト・ジャーナリスト)

## 「何が大切なことか」

本来なら、締め切り間際まで新しい「ニュース」を待ってから、書くのが「正しい」のかもしれないが、現在進行形で腐敗する報道のあり方を考えるなら、今朝（4月24日）の「ニュース」でも同じだろうと思って、書き出した。つまり、SMAPの草薙剛さん逮捕に関する報道をテレビの記者が「証拠隠滅の恐れのある場合は、拘留の延長もありえる」と真顔で言ったことに象徴されること。この記者（女性）、大丈夫？と思った。証拠隠滅の恐れって、草薙さんが自分のオチンチンを切って捨てる、あるいは捨てる見つかる可能性を否定

できないので、その場で食べちゃう恐れある、とでも思っているのかしら。

この警察の広報と化したテレビが、草薙さんを大いに使って隠しているものこそ、本来、ジャーナリズムなら報じなければならないものはず。これで、昨日まで気になっていた森田健作知事の公選法違反、違法献金問題どころか、海賊法案問題も「飛ばされてしまった」と思っている読者も、本誌には多いだろう。悔しい〜と。

その悔しさを共有する本誌読者だけでなく、いいえ、悔しいとすら感じるだけの情報から排除されている“正しい”青少年向けにも書いた岩波ジュニア新書『戦争を止めたい—フォトジャーナリストの見る世界』を4月に出版した。写真を多用したのは、写真も見ただけでなく、「読んで」ほしいからだ。「サダム像のやらせ」から「サマワの嘘」「劣化ウラン問題の隠蔽」、そしてイスラエルや日本の戦争政策を問うたつもりだ。是非、ご自分をご覧になるだけでなく、隣近所の青少年にも勧めて欲しい。けっして平和のための「武器」でなく、道具としても。

2009年4月24日

## 集会・行動情報 5/15～5/31

▶5/15 (金) 沖縄の「復帰」37年を問う！ すべての軍事基地撤去！ 新基地建設を許さない！ 5・15集会 ◆本永春樹（一坪反戦地主会）◆18:30～◆千駄ヶ谷区民会館／1F会議室1号（JR新宿駅徒歩10分）◆500円◆主：沖縄・一坪反戦地主会関東ブロック（090-3910-4140）

▶5/18 (月) ストップ！ 壊憲手続き法 始動まであと1年——国民投票法を許さない5・18集会 ◆坂本修（弁護士）◆18:30～◆コア・いけぶくろ文化ホール◆500円◆主催：同集会実行委員会（03-5802-3809）

▶5/20 (水) 裁判員制度実施阻止へ！ 5.20銀座デモ ◆19:00～◆日比谷公園霞門集合（丸ノ内線ほか霞ヶ関駅下車徒歩2分）◆主：裁判員制度はいらない！ 大運動（03-3348-5162）

▶5/22 (金) 連続講演会「日本国憲法と裁判官」第1回 ◆石松竹雄、守屋克彦 ◆18:00～◆伊藤塾東京校（JR渋谷駅南改札西口より徒歩3分）◆500円◆法学館憲法研究所（電話：03-5489-2153）

▶5/23 (土) たんぽぽ舎20周年記念の集い ◆第1部：記念講演：広瀬隆（作家）、リレートーク、写真展示、映像上映など ◆14:00～◆全水道会館（JR水道橋駅東口下車2分）◆1200円 ◆主：たんぽぽ舎（03-3238-9035）【18:00からは第2部：パーティー／参加費別途】

▶5/25 (月) 基地の再編強化反対！ 自衛隊の海外派兵を許すな！ 東京東部5・25反戦集会 ◆18:30～◆

錦糸公園（JRほか錦糸町駅徒歩3分）◆沖縄の闘いと連帯する東京東部集会実行委員会（03-3683-9765）

▶5/29 (金) 「ミサイル防衛反対ソウル国際会議」で何が語られたか——北東アジアの軍縮と平和メカニズムの確立に向けて ◆報告：杉原浩司、山口響ほか ◆18:30～◆富士見区民館／洋室A（JRほか飯田橋駅徒歩5分／「国連・憲法問題研究会」の名前で借りています）◆500円 ◆主：グループ 武器をつくるな！ 売るな！、核とミサイル防衛にNO！ キャンペーン（電話／Fax：03-5711-6478）

■イスラエルとガザ：2人のジャーナリストが語る——あれは戦争だったのか、メディアは何を訴えられるのか ◆藤原亮司（フォトジャーナリスト）、小田切拓（ジャーナリスト）◆18:30～◆世田谷区烏山区民センター／3F第2会議室（京王線千歳烏山駅東口徒歩1分）◆800円 ◆主：今とこれからを考える一滴の会（03-5313-1525）

▶5/31 (日) スピークアウト for アクション：イスラエルを変えるために ◆講師：板垣雄三、寺中誠、東澤靖、役重善洋、山崎久隆 ◆13:30～ シンポジウム／15:15～分科会：①イスラエル製品／関連企業をボイコットする、②イスラエルの武器生産・取引・使用の実態を明らかにする、③指導者たちの戦争犯罪を裁かせる、④「歴史事実」の確認からはじめよう／17:30～ 全体会 ◆在日本韓国YMCA（JR水道橋駅徒歩6分）◆主：「イスラエルは占領とガザ侵攻をやめろ！」実行委員会（連絡先：speakout.demo@gmail.com）

## 事務局から～

◆今号が第4期の最終号となります。多くの皆さんの定期購読とご支援に感謝します。

◆今期分の定期購読料のお支払いがまだの方は、お急ぎください。

◆次号からの第5期（2009年6月～2010年5月／月2回発行／24号分）の定期購読も、ぜひよろしくお願いします!!